

「切っても切れない」

私は野球が好きだ。大学に入学した今でこそ、あまりテレビ中継すら追う時間がないが実家にいた時は毎日のように中継を見て、両親と試合の結果に一喜一憂していたし、野球好きが高じてか、高校・大学と野球部のマネージャーを続けている。

そんな私の野球にまつわる最初の記憶は、小学校1年生の時に父に連れて行ってもらった生の試合観戦だ。小学校にも慣れてきたある日、父に今度母と3人で野球を見に行こうと誘われた。当時の私は野球に全くといっていいほど興味がなかったが、夜勤が多かった父が夕食時にいるときはなんとなくテレビでは野球が流れていたような気がする。興味がないとはいっても、家族3人で出かけることなんて年に数回だったし、球場のある場所は家から2時間ほどの場所にあったため、ちょっと旅行みたいだなんて思って、2つ返事で了承した。

特にポジションや選手名などの予備知識もないまま、観戦の当日を迎えた。まずは球場が大きい！おいしそうな屋台がたくさん！すでに試合が入る前から何を見ても感動する。そんな私を見て両親は笑う。球場に入り、チケットと席番号を見比べながら座る。今日の父はお酒も入っているせいかなんだか饒舌。子どもの私にはよく分からなかったけど今日の先発は〇〇だ〜とか色々な知識を披露してくれる。

試合が始まった。いつもテレビで見ているような切り取られた四角以上に大きな景色が広がっている。肉眼ではピッチャーが遠くに見える。音量を上げなくても応援歌が聞こえる。追い込まれたときの観客の声援が、ベンチの選手の声が、聞こえる。試合はビックリするほど打てずに負けたし、回の途中で帰る観客をたくさん見た。それでも、私を野球の虜にするには十分すぎる試合だった。

それからというもの、いつでも私の思い出には野球観戦がある。ある時は胃腸炎になっても行ったり、ある時は誕生日に両親がチケットをプレゼントしてくれたり、私の大学のオープンキャンパスのついでに本拠地に見に行ったり。父と2人で地方球場に見に行った時は、母はそれほど野球が好きではなかったはずなのになぜか悔しがっていた。どうやらいつの間にか野球は家族を繋いでいたようだ。大学に入ってから、私のバイト代で両親にチケットをプレゼントしたときは本当に喜んでくれた。

そして高校に入ってから、自分がベンチの中にいるという体験を何十回としてきた。試合に勝てば自分のことのように嬉しいし、負ければ涙が出るほど悔しい。なぜ実際に競技するわけでもなく、ただ雑務に徹しているだけなのに、最後まで選手と同じような気持ちを持つことができているのかと聞かれることが多々ある。それはマネージャーがいればいるだけ回答はあるだろうが、私にとってはこの原体験があるからだといえる。試合に負けても面白い試合があるのだという野球へのワクワク感が根底にあるからこそ、私は今まで部活動に対しても、野球そのものに対しても失望しなかったのだと思う。

もうすぐ大学4年生になり部活動も引退を迎えるが、きっとまだまだ私と野球の関わりは続いていく。もしかしたら試合の行く末にうんざりして見ない日が続くかもしれないけど、結局野球に戻ってくることもなんとなく予想している。そうやって、これからも自分の人生のそばに野球があったらいいなあと思っている。そしていつか自分の大切な人に、野球を通じて感動体験してもらおうことが私のこれからの小さな夢でもある。

「様々なスポーツとの関わり方—マネージャー体験を通して」

「ここまで支えてくれて、本当にありがとう！だからこそここまでやってこられた。」この言葉は、私がマネージャーとしての引退試合で選手が私に掛けてくれた言葉だ。私は高校時代、陸上部のマネージャーとして活動していた。中学時代は選手として陸上を行っていたこともあり、選手の悔しさや悩みなどを親身になって聞くように努力した。陸上はよく、「数秒のためにあんなに努力する意味が分からない。ただ走る事の何が楽しいのか分からない。」と言われる。しかし、実際はその数秒または0.1秒のために何時間も努力をして、一瞬の中で選手は勝負している。たった1秒が大きな成果となり、やり甲斐を感じられる素晴らしいスポーツだと私は思う。

私の高校は、棒高跳びの強豪校であり、顧問も棒高跳びで日本記録を持っていた経験者だった。毎年多くの一年生が棒高跳びを学ぶために、遠くから入学して来た。顧問の指導にも熱が入っており、時には選手とぶつかり合う事も多かった。私達マネージャーは、顧問と選手の中立として部を支える様努力した。しかし実際はそう上手くはいかなかった。三年生最後の試合を1ヶ月前に控えた4月。顧問が棒高跳びの選手ばかりに力を入れ、私達の指導をしてくれないと、他の種目の選手達が不満を持ち、練習のやる気を失ってしまった。顧問は練習に力を入れる様説得したが、彼らの心には響かず、私達マネージャーに顧問への不満を言い続けた。私は選手に対し、「あと1ヶ月で大切な大会があるから、みんなで最後まで頑張ろう。顧問もちゃんと見てくれるよ！」と声を掛けた。私なりにたくさん考えて、正しい答えを見つけたつもりだった。しかし、選手には「練習をしてないマネージャーにはこの気持ちは分からないよ。ごめんね。」と言われてしまった。私が一番悔しかったのは、選手の気持ちを分かってあげられなかった事よりも、選手に謝らせてしまった事だった。

マネージャーは選手の身体面だけでなく、精神的な部分も支える事が役目だと思っている。だからこそ、私の言葉で選手を傷つけてしまった事が苦しかった。それから2週間ほど、部の雰囲気は陰悪なままだらだらと練習が続いていった。私達マネージャーはこのままではダメだと思い、部全体で話し合う機会を設け、このままでは大切な大会が台無しになってしまう事、全力で陸上に向き合って欲しいという思いを伝えた。すると選手は私達の思いに応える様に、今までの何倍も練習に力を入れ、前向きな姿勢を取り戻してくれた。顧問も棒高跳びだけでなく全ての種目を精一杯指導し、選手との信頼関係を築いていた。

そして、待ちに待った大会当日。全員で円陣を組み、選手の目には気合が漲っていた。私達はその思いを汲み取り、必死に選手のサポートをした。大会では、悔しい結果をして涙している選手や、自己ベストを出し嬉し泣きをする選手など、結果はそれぞれだった。しかし、選手がやり切った表情で私達の所へ駆け寄って来てくれた事が、嬉しかった。そして、試合後選手達に呼ばれ何かと思ひながら向かうと、思いがけない事が起きた。選手一人一人のメッセージが書かれたアルバムと共に、あの言葉を言ってくれたのだ。私は選手にここまで大切にされていると思っていなかったし、マネージャーの仕事はあまり重要で無いと思っていた。しかしこの瞬間、スポーツというものは選手だけでなく、それを支える周りの人々みんなで作るものだと感じた。私は高校時代にマネージャーを経験し、スポーツには競技をする事、応援し支える事など、多くの関わり方がある事を学んだ。だからこそ、これからの人生で、様々な方法でスポーツと関わり、自分を成長させていきたいと思っている。

「両膝前十字靭帯断裂」

「走るのやめて、水泳部にでも入ったら？」心無い医者言葉に、当時中学生の私がどれだけ追い詰められたか。あれからだいぶ月日が立った今でも笑い話として話すことが出来ない。一瞬だった。気づいたら床に転がっていた。わたしは、部活中に怪我をしたのだった。前々から痛かった右膝が、あの瞬間に大爆発した。中学生最後の大会の直前の出来事だった。

膝の前十字靭帯は、一度切れてしまったらもう自然には治らない。これからも大好きな運動を続けていきたかった私には、手術するしか選択肢は無かった。しかし、地元には手術できる医者がいなかった。いたのは、「陸で運動するのは諦めて水泳でも始めたら？」なんて冷たく私に言い放ったあのお医者さん。最後の大会に出られないかもしれないと考えるだけで悔しくて。靭帯が切れた膝は、雷がピンポイントで落ちたんじゃないかというくらいビリビリして、痛くて。泣いている私に向かって何故あんなことが言えたのか。あれから8年経とうとしている今でも全く意味が分からない。

結局、地元から車で2時間の距離にある大きな病院で無事手術が受けられた。残念ながら中学生最後の大会には間に合わなかったが、手術を受けられたことでこれからも運動ができるようになった。しかし、私の膝は怪我をしやすい構造をしていることが発覚した。膝に爆弾を抱えているつもりで、ケアしながら運動をしていかなければならないと忠告された。

高校、そしてその後の大学でも、部活に入って運動を楽しんだ。大学ではアルティメットという新しいスポーツを始めた。走る、投げる、跳ぶといった要素が詰まったアルティメットは、運動好きの私には楽しくてたまらない競技だった。しかも、私にとって初めての団体競技への挑戦となった。自分のことだけでなく、チームの仲間のことも考えて、頭を使って協力しながらプレーするのが本当に楽しかった。

競技を始めて一年目の冬、私は、また、膝の靭帯を断裂した。今度は前回とは逆の左膝の靭帯だった。「走るのやめたら？」というあの医者言葉が一瞬頭をよぎった。爆弾を抱えた私の膝は激しいスポーツに適さないのだと分かった。とても悔しかった。やけくそになり、もう何もしたくないという気持ちにさえなった。でも、やっぱり私はスポーツを嫌いにはなれなかった。

これからも運動を続けて行きたかったから、私は今回も手術の道を選択した。一人でバスに乗って病院に通い、そこで手術をうけ、リハビリに励んだ。完全復活とまでは行かないにしろ、一年後には復帰した。しかしその半年後の大会中、再建手術をした左膝の前十字靭帯に再び傷をつけてしまった。本当に私の膝は運動に向いていないのかもしれない。悔しかった。でも、どこかで開き直っている自分がいた。

残念だが、大会に出て本気で走ったり跳んだりはもうできない。私は、私にできる範囲内の運動をしていくことにした。膝に大きな負荷をかけるような動きをするものは避け、運動をするときは必ずサポーターをつける、ウォーミングアップを入念に行うことを徹底することにした。夜、ランニングをするのを日課としているが、どの程度までなら大丈夫かの判断が上手くできるようになってきた。やっぱり、運動を嫌いになるなんて私には出来ない。大学卒業後に就職してからも、何らかの形でスポーツを続けて行きたい。歳をとってお婆ちゃんになっても、スポーツが大好きな私でいたいと、心から思っている。

「おうち時間」

大学生になり、時間とお金に余裕が出始め、休業期間中には友人と様々な場所へ旅行をし、美味しいものを食べ、遊び、思い出に深く残る時間を過ごした。しかし、大学三年生となった2020年。生活は大きく一変し、いわゆる「おうち時間」を強いられる状況となった。世界的に感染症が大流行し、これまでの生活からは考えることができないほど私たちの日常は大きく変化した。

友人と旅行に行ったり、遊んだりすることは勿論好きだ。しかし、もとより私はアウトドアな人間ではない。特に趣味もなく、休暇といっても何か特別なことをする訳ではなく、できるのであればなるべく家で過ごしたい。そんな私にとって去年は、ある意味特別な休暇体験だったのかもしれないと思い、自粛中に考えたことや変化したことを書いていく。

自粛生活といっても悪いことばかりではない。以前よりも自分の為の活動に使える時間が圧倒的に増えたように感じる。しかし、先ほど述べたように私には特に趣味がなかった。家ですることといっても、オンラインゲームをし、好きなロックバンドの曲を聴き、映画を見るくらいだ。そんな生活を続ける中で、今後ずっと家に居なければならぬのかもしれないという不安と焦りを感じ、自粛期間中に何か新しいことを始めようと思い立った。なにかきっかけがあった訳ではないが、昔から音楽や歌うことが好きでやってみたかったギターをはじめた。まだまだ練習中だが、自分にも熱中できる趣味ができたことを嬉しく感じている。周りからすれば小さいことかもしれないが、無趣味ということに少なからず悩んでいた私にとってはこれも大きな変化の1つである。

また、人との繋がり的重要性を再認識すると同時に、オンラインの偉大さも感じた。基本的にインドア派の人間で、人と会う機会が減っても問題ないと思っていたが、遠い親戚や友人たちと会う機会が全くなってしまい、やはり気が滅入るような感覚を覚えた。大げさかもしれないが、人間は人との繋がりの中で生きているのだと再認識した。そんな状況を緩和してくれたのはオンラインだ。大学の講義、仕事、インターン、面接といったように、世の中のものがどんどんオンライン化されている。対面で顔を合わすことができずとも、実際に会って同じ時間を共有している感覚をもたらせてくれるということで「オンライン飲み会」なども大きな話題となった。実際に私自身も何度かオンライン飲み会に参加したことがあるが、実際に会っているとまではいかずとも楽しい時間を共有することができたと感じている。また、移動時間や費用的な面を考慮するとオンラインのほうが効率がいいといったように、オンラインだからこそのメリットもある。世の中の風潮的にオンライン化は毛嫌いされているようなイメージがあるが、「アフターコロナ」という言葉があるように、終息後もこの期間中に得た学びや変化を活かしていければ、より暮らしやすい社会になるのではないかと考えた。このように、オンラインの可能性は計り知れない。今後社会に出た時に、仕事の場面でも上手に活用できる人間になりたい。

今後いつまで今のような生活が続くかは分からないが、この先振り返った時にコロナのせいで貴重な大学生活を無駄にした、と後悔しないようにしたい。そのためにもインターネットを使って情報収集を進め、使えるものは使い、積極的に学習を深めていきたい。そして、去年の反省点を活かし、余った時間を使って自身のスキルアップを図ったり、教養を深めたりと、充実したおうち時間を過ごしたい。

「はじめての雪景色」

最も印象深い余暇活動は何か、それを考えたとき私はある友達とスキーに行ったことを思い出した。彼は私が高校2年生の時、当時の担任の先生とともに教室にやってきた。「私の名前はデム・セイラムです。よろしくお願ひします。」それ程長くない簡単な自己紹介だったと記憶しているが、拙い日本語ではあったものの丁寧に話す彼の様子に、真面目な人だという印象を受けた。彼はガーナからの留学生で、日本文化にとっても興味があり数か月だけ留学に来たのだという。はじめこそ言葉通じにくく苦勞していたが、彼が人当たりのいい人だったことなどが起因して、あっという間にクラスに馴染んでいった。私も、クラスに男子が少なかったこともあり彼と接する時間が多く、とても仲良くなれたと思っている。

彼が来てからの学校生活は、それこそ印象深い余暇活動であった。休み時間の会話も、学校行事も、部活動体験で私の部活に参加したことも、すべてが刺激的で思い出深く残っている。そんな日々を過ごし、冬を迎えたある日の放課後、いつものように彼と下校しようとする、突然雪が降ってきた。彼は初めて見る雪に興奮した様子だった。少し話が脱線するが、彼は日本で学校以外の場所にあまり行ったことがないらしく、留学の期間も残りわずかだった。雪に喜ぶ彼を見ながら、そのことを知っていた私は彼のためにできることはないかと考え、スキーに行くことを思いついたのだ。ちょうど迎えに来た彼のホストファミリーにそのことを話すと、「私たちもまだ何もしてあげられていないからぜひ」と、快く承諾してもらうことができ、私は彼と、彼のホストファミリーとともにスキーに行くことになった。

スキー当日、スキー場に向かう車の中で普段の制服とは違う彼の装いに妙な緊張感を覚えたことを覚えている。少しずつ白くなっていく外の景色に彼だけでなく私も胸を高鳴らせ、スキー場に着くと、目の前に広がる一面の雪景色に彼は一瞬言葉を失ったのち、満面の笑みを浮かべていた。必要な手続きを済ませると、「二人で遊んできていいよ。」とホストファミリーに言われ、二人で初心者コースを滑りに行った。今になって思うが、スキーが初めての彼に何の練習もさせず、いきなり滑らせたのはまずかった気がする。そんなことも考えずいざ滑り出すと、案の定彼は転んでいた。コースを滑り終えるころにはお互い雪まみれで、彼は下で待っていたホストファミリーに笑われていた。彼はそのままホストファミリーと滑りに行き、下で降りてくるのを待っていると、さっきと同じように雪まみれの彼とホストファミリーが降りてきた。そんな彼らを見て、さっきのホストファミリーと同じように笑ってしまったが、今までにないような彼の笑顔に、嬉しくなったことを覚えている。結局彼のスキーの腕前が上達することはなかったが、傍目には同じに見えた数々の転倒や雪景色を、あの時はこうだった、と細かく何度も笑顔で語る彼をみて、連れてくることができ良かったと思った。それはホストファミリーも同じだったようで、「今日は一緒に来てくれてありがとう。デムが日本にいるのはあと少しだけどこれからもよろしくね。」と言われた。

彼との思い出には、どれも彼の笑顔が映っている。それは彼がよく笑うからというだけでなく、私が何となく見ている景色、過ごしている時間が、彼にとっては特別だったからだろう。普段からそうだったのだろうが、彼とスキーに行ったことでそのことが分かった。かといって私は彼のように、日々の生活や時間を丁寧に過ごすようにはならなかったが、人の過ごす時間を少しでも特別なものにしたいと思えるようになった。先日、宇都宮で初雪が降った時、コンビニの外にいた私の隣に偶然いたガーナ人の男性に話しかけられた。彼も雪を初めて見たと言っていたが、あの日が彼にとって特別な日になってくれていたらいいと思う。